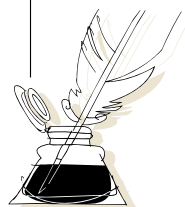


人生讃歌

文章について



ときおり学生や随筆の集まりから文章の書き方について話してくれと頼まれては戸惑う。機械の時代に限らず、人と人とのつながりは言葉と文字による心の表現が重要と思われ、よく自身が学ぶためにも話してきたが手さぐりで、閉口した。そして結局、文はその人その人の個性で違うのが当然だから、書き方は書く人の数だけあると言ってしまうと先へ進まないの二応、よく個人が考える誰にでも共通すると思える方法を話してきた。

思っていること、考えていること、感じたことをそのまま文字にすればいいと話す。だから文字を書ける人なら誰でも文を書けると言うのと笑われたが、本当のことである。早い話、文章は喋るとおりに書くのが一番、手取り早い。言葉は考えや気持ち他人に伝える道具なわけで、それを口で話すのが会話だ。その話し言葉を文字で表現するのが文章と言うだけのはなしだ、と考えるのも一つの方法である。ただしその話し言葉の語彙が貧困であれば、生まれてくる文もまた狭く、深みのないものになる気がするから、まず話し言葉を豊富にすることだろう。

饒舌とも言える知人の男が、広島島の友人から松茸が送ら

れてきたが礼状がうまく書けないと言った。それでよくが、じゃあその感想を喋ってみてよと言うと彼は喋りだした。「いやあ、うまい。これまでにいろいろな松茸を食べたが、こんなうまいのは初めてだ。さすが日本一の味と言われる広島産だ。やっぱり風土なんだろうね。凄い。こんなの食べてるなんて広島の人うらやましいよ」と言った。彼が喋った言葉を、ぼくはそのまま素早く紙に書いて彼に見せた。じつに見事な感想であり手紙になついたのである。彼が喋ったことをそのまま文字にしただけなのだ。本人も「え？これ俺が喋ったの？」と驚いた。

★

自分は文才がないからと言う人がいるが、その考えも当たっていない、と思う。文才のあると言われる人など二十万人に一人いるかどうかで、すぐれた文を書く人はみな文章を書くことに努力しただけのはなしだ。

見たとおりに書くというのも、そのとおりのことである。初冬の風景を「朝起きて窓の外を見ると雪が降っていて隣の家が白く霞んでいた。初雪だった」は多くの眼に映ったままの表現であるが、これに「さ、スキーだ、と思った」と続ければ書いた人の気持ちが表れると思う。この文も見たままの情景だ。

ともあれ文章の表現に必要なのは観察力を磨くことだろう。普通、たいがいの人の感じ方は似ていて、たとえば「青い空、夏祭り、うまいラーメン」のとらえ方は共通しているが、その感じ方を文章にすると、違うのは観察力の違いのはず。「うまいラーメン」では読む者にうまさは伝わりにくいが、これを「彼は井の中へ顔を突っ込むようにして、ひっきりなしに箸でラーメンを口へ掻き込み、すぐ両手で井を持つと音をたてて汁をすすり込む。顔や首を汗が流れているのかまわず、視線を井の中へ入れたまま酔ったように食べつづける」とすると、

うまさが少しわかる気がするのである。ぼくは少し長くなつたが、もつと上手に短い文で表わせるはずだ。

★

観察力のことを文学で感覚というが、まずは対象をしつかり見て感じる力を磨くことだと思う。失恋男の表現は多くの得意とするところである。つらかった、落ち込んだは普通すぎるから「その夜ぼくは再び会うことのない彼女と別れたあと、二人で裏通りを歩いた。街灯が暗く感じ、行き交う人がみな楽しげに見えた。ぼくは自分がうつむいて背中を丸めて歩いているのを感じた。足が重く、自分の靴底がアスファルトを



挿絵/中江潤一

引きずる音が耳に痛かった」と書けば、失恋の気持ちをいくらか表現できるように思う。これもべつに好い文でも何でもなく、ぼく自身が大昔、好意をもっていた女性に去られたときの気持ちをそのまま文字にしたにすぎない。

観察というのも、そのことや物の特色をとらえることの気がする。何を書いていいかわからないということを書くが、それも考え方の問題だと思う。たぶんものを書く人の多くは、まず自分の生活から題材を見つけることが多いように、ぼくは思う。すべての人が自分の生活、考え、生き方から生まれる発想による言葉で書いたはずだ。己の生きざま、体験、読書、感性、想像から生まれる意識、無意識に押されて書く以外に書きようがない、とぼくは考えている。

★

結局、文章は文字が書ける人は誰でも書けるというところへ戻るのである。まずはいい文章をたくさん読むこと、これに尽きると思う。これまですぐれた文を書いた人も自分の考えを表現する感覚を磨き、たくさんさんの言葉、語彙を吸収し、いい文を読んで自分なりの表現言葉を創り出したと考えるのである。いい文章を読むことによって思考力、判断力、想像力を養い、生き方に広がり、深さをつくることから始めたいものだ。自省をこめて思う。ぼくの方法の二つは、自分の劣等感と自己嫌悪を弾力^{はね}にして書くことで、その劣等感と自己嫌悪が一時、消滅するように感じてきた気がするのである。それで何とか先へ進む生きる力が生まれた、と思っている。ま、ぼくなんかの思いつく文章の書き方なんかは、せいぜいこの程度のことでしかない。ともあれ、どういう文章が書けるかは、文はその人の思想だという認識と、どういう生き方をするにかにかかっている、と考えている。

①